

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



11月の探鳥ツアーは予想よりガン・カモ類が少なかったが70種の鳥を確認。写真はナベコウ

Contents

- 2020年 年頭のごあいさつ P 2
- 年末寄付のご報告 P 2
- 2020春 黄土高原スタディツアー参加者募集 P 3
- 大同緑化協力 25年の軌跡 P 6
- 黄土高原史話〈96〉 P 7

2020.1
191

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

2020 年 年頭のごあいさつ

GEN 代表 前中久行



2020 年、恭賀新年、新年快樂。昨年は大変お世話になりました。ご支援をいただいた会員の皆様、企業、団体および広く関心をもっていただいた方々に大変感謝しております。今年も「緑の地球ネットワーク GEN」をよろしくお願いします。

大同では 1992 年以来累計 6000 ヘクタール 1900 万本を植えました。昨年度夏のスタディツアーでは 2 年ぶりに大同市城区を訪れ「緑色地球ネットワーク大同事務所」の方々と旧交を温めました。また采涼山地球環境林や実験林場カササギの森ではかつての黄色の大地が全面緑の大地に変貌し樹木がさらに大きくなった様相を確認しました。ツアー後事務処理で大同に数日留まりました。定年退職された武春珍元所長の永年の貢献に感謝状を贈りました。また口泉植物園を訪れて GEN の活動資産（元環境林中心）が有効に活用されていることを実感しました。管理棟中庭のシダレニレは友好苑のシンボルツリーとして残され友好苑が日中協力事業を引き継ぐものと碑文が刻まれています。日本語で「環境は国境がない」という GEN の活動理念も刻まれています。ニレと石碑を前にして私は大変感激しました。日本側が提案したことではありませんがその想いが実現していたからです。GEN の四半世紀におよぶ交流と相互理解の証です。嫌がる高見邦雄副代表を無理矢理立たせて碑文と共に写真をとりました。

年末寄付のご報告

おかげさまで 699,057 円、58 件のご寄付が集まりました

11 月の GEN 会報で年末寄付のお願いをしたところ、たくさんのご寄付をいただきましたのでご報告いたします。11 月 5 日～12 月 30 日までの期間に 699,057 円、58 件のご寄付をいただきました。みなさまのご協力ありがとうございました。

前年同月比の寄付が 888,729 円、58 件でしたので、金額は減少しましたが、

象面積も 16 ヘクタール強に倍増、しかも河の兩岸を含むという嬉しい変更です。樹木見本園にはすでに 80 種以上が植栽されています。また日中の協力事業であるという両国語での説明版が設置されています。今年は近隣山地からさらに新規樹木種を導入して 100 種類以上とする目標です。

乾燥地域では湿地はとくに貴重な植生や生態系といえます。鳥類の繁殖地、渡り中継地としても重要です。しかしこの地域の鳥類については情報が不足していました。当初確認されていた鳥は 20 種類程度でした。このため専門家や鳥調査ツアーによって鳥類の情報を集積中で、すでに 120 種類以上の鳥が確認されています。現状では樹木見本園や周辺の湿地では鳥類相は貧弱ですが、現状を確認しておくことは完成後の樹木見本園や湿地の鳥類誘致効果の根拠になります。大きな木が無いために木の空洞が少なく鳥にとっては“住宅難”と見立てて、地元の小学生と一緒に巣箱をつける計画をしています。

国内での講演会、学習会、支部活動、運営懇談会、総会、自然と親しむ会、その他について様々な形での提案、参加、ご支援、ご協力をお願いします。スタディツアーや探鳥ツアーなどにも是非ご参加ください。

件数は前年と同数でした。長年この時期にご寄付いただいている方もいらっしゃいます。みなさまの末永いご支援に感謝の思いでいっぱいです。

黄土高原の緑化をすすめるため、今後も無理のない範囲でけっこうですので、ひきつづきみなさまのご協力をお願いいたします。

2020 春 黄土高原 スタディツアー 参加者募集

春は植樹の季節、今年は黄土高原での植樹活動に参加しませんか。

GEN の蔚県での春のツアーは今回で 4 回目、今年も村での植樹活動はもちろん、ここでしか見られない打樹花、子どもたちとの交流、実物を展示している博物館の見学など、これまでの参加者から「ここでしかできない貴重な体験」とご好評をいただいています。

○日程：2020 年 4 月 18 日（土）～23 日（木）5 泊 6 日

○旅行代金：189,000 円（学生割引 20,000 円）（国際航空運賃、空港使用料、国際観光旅客税、中国国内の交通費／食費／宿泊費を含みます。旅券取得費用、海外旅行保険、燃油特別付加運賃、個人行動時の費用は含みません。GEN 年会費〈一般 12,000 円、学生 3,000 円〉が別途必要です。）

○訪問地：中国張家口市蔚県（北京経由）

○定員：30 人

○最少催行人員：10 人

○申込締切：3 月 2 日（月）

○添乗員は同行しません。GEN スタッフ 1 名が関西空港から同行します。

○参加をご希望のかたは GEN 事務所までご連絡ください。資料は（株）マイチケットから発送します。



GEN 自然と親しむ会

南港野鳥園で冬のバードウォッチング

大阪南港野鳥園で冬のバードウォッチングを楽しみませんか。

南港一帯は古くは住吉浦と呼ばれ、シギやチドリ、ガンカモ類が渡来する渡り鳥の重要な生息地でした。大阪の都市化とともに生息する場所が奪われるなか、野鳥の環境を保護しようと大阪南港野鳥園が作られました。

今回は GEN の中国での野鳥調査にご参加いただいている高田直俊先生に解説していただき、冬の野鳥観察を楽しみます。ぜひご参加ください。

○日時：2020 年 2 月 8 日（土）10 時～14 時ごろ

○場所：大阪南港野鳥園（大阪市住之江区南港北 3-5-30）

○案内：高田直俊さん

○集合：10 時に大阪メトロ南港ポートタウン線「トレードセンター前」駅改札口

○参加費：700 円

○定員：20 名

○持ち物：歩きやすい服装と靴、弁当、飲み物、敷物、あれば双眼鏡、野鳥



2020 年 5 月 探鳥ツアー 予告

5 月の探鳥ツアーの日程が決まりましたのでお知らせします。専門家に同行できる貴重なツアーですのでぜひご参加ください。

○日程：2020 年 5 月 12 日（火）～16 日（土）4 泊 5 日

○訪問先：中国河北省張家口市蔚県（北京経由）

○費用：218,000 円（前回実績）

○見ることが期待できる鳥：アカツクシガモ、オオカラモズなど。

※詳細は次号でお知らせします。

運営懇談会を 開催しました

2019 年度の運営懇談会は 12 月 7 日（土）に大阪の大淀コミュニティセンター、12 月 14 日（土）に東京の立教大学池袋キャンパスにておこなわれました。大阪会場は 12 名、東京会場は 23 名が参加しました。（写真は大阪会場）

最初に高見副代表が写真を見せながら中国の活動の報告をおこないました。

そのあとはフリーディスカッション形式で参加者が GEN の活動について自由に意見を述べ合いました。

大阪会場の議論のなかでは、GEN のこれまでやってきた活動の年表があると活動がより理解しやすい、という声があがりました。





鳥に人に驚きいっぱい、探鳥ツアー

高田 みちよ (GEN 会員)

11 月 7 日～11 日の日程で張家口探鳥ツアーをおこないました。4 名が参加しました。

私が勤める高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）では年 2 回の連続講座「自然と本と博物館」を行っています。自然系の本の著者に、対象となる生き物の魅力や本を作るにあたっての苦労などを 2 時間でお話してもらう講座です。11 月の講座をお願いしようと大西敏一氏に打診したところ、「その日程はお父さん（高田直俊）と中国に行きます」とのこと。

6 月に行われた探鳥ツアーがとても楽しそうだったので行ってみたくてなんとなく思っていたので、ちょうど仕事が休めそうなタイミングでもあり、参加することにしました。どのぐらい寒いのか、現金が使えないってどういうことなのか、トイレ事情が悪いとはどの程度なのか、などちょっと不安な当日を向かえました。

北京空港の入国審査を無事済ませた初っ端に大惨事！ トイレにパスポートを置き忘れました。気が付いたのは



メジロガモとアカハジロ

空港のモノレールを降りた後で、逆戻りはダメと言われ、information で聞くもカウンターで担当係員に言え、とのこと。迎えにきてくれた張さん、霍さん、通訳の黄さんに会ったとたんから探し物依頼です。幸いすぐに見つかりました。もし出てこなかったら何のために来たのかかわからないところでした。ホントよかった。皆様にご迷惑をおかけしました。

気を取り直して一路尉県へ。官庁ダムはカササギの集団時があるとのことでしたが、それほどではなく、水面の広さに対して鳥の数は少ない。と思っていたら、クロヅルが 100 羽ほど飛び越えていき、コクマルガラスがキョンキョンという声とともに群れで飛び、日本では見ることもない光景に遭遇しました。

2 日～4 日目はダムと草地で鳥見です。大西さんがルールルールと鳴くと、カラチメドリが応えて鳴きます。水面ではメジロガモとアカハジロが同時にいて、雑種化しているという状況がリアルに確認されてしまいました。サカツラガンにはオレンジの S73 という首輪がついていました。どこでマークされたのでしょうか。草地、ヨシ原、水面の広さに対して鳥の数は少なかったのですが、日本では見ることもできないオオカラモズ、ダルマエナガなどをじっ

くり見れたのがうれしかったです。

鳥以上に驚きだったのが、中国人。道路交通の無秩序さ、ゴミの多さ、建設ラッシュ、食べるものの珍しさ、ホテルの設備が〇〇なところ。張さんの事務所の 2 階にはこの夏から親子教室を作ったとのこと、絵本を揃えて学校、幼稚園帰りの子どもとその保護者のコミュニケーションスペースが作られていました。日本にも NPO によって親子の小さなスペースができていますが、どちらの国でもまだまだ子育てには行政では足りない課題があるようです。

本題の植林の本気度は圧巻でした。「荒涼とした」という言葉が本当にぴったりのエノコログサとシロザしか生えてないような山地に木を植え続けているし、町中のいたるところにボブラヤヤナギが植林されているし、人の営みのほうが驚きの連続でした。唯一残念だったのは、体調があまりよくなく、5 日間ずっと一緒に回ってくださった張さんと食事の面倒を見てくれた柳さんの期待に応えて飲み食いできなかったこと。次回は体調を整えて、張さんと乾杯したいです。



日本ではほとんど見られないオオカラモズ

なか、自らの意思で動いて世界の問題解決に取り組んでいる高校生がこんなにいますよー、とおおいに宣伝したくなった 1 日でした。（河本）



ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 2019 に出展しました

12 月 15 日（日）、大阪 YMCA にてワン・ワン・ワールド・フェスティバル for Youth がおこなわれ、GEN は NGO ブースに出展しました。

ブース出展は今年で 4 回目、毎回高校生の元気な姿に圧倒されています。ワンフェス for Youth の開催は今回で第 6 回目、かつての高校生が大学生や教員

となってサポートしていると聞き、続けることの意義も感じました。

今年は舞台上で開会と閉会のセレモニーがあり、刷りたてのワンフェス Youth の新聞号外が配られるなどの演出もあり、出展する側も楽しませてくれました。

「最近の若者は…」と言われがちの



夢の島で楽しく植物観察

大野 健二 (船橋市)

11 月 23 日、GEN 関東ランチ自然観察会をおこない、夢の島熱帯植物館を訪問しました。13 名が参加しました。

11 月 23 日（土）10 時～14 時、恒例の自然観察会が夢の島熱帯植物館にて開かれました。日本自然保護協会自然観察指導員の小原芳郎氏を講師に迎え、13 名が参加しました。

小原講師は植物の植生がご専門。軽妙な語り口ながら幾つもの質問を発して参加者の関心を引き寄せます。まずは植物の「科」について。そして「ゾウタケ」の前でバンブー⇒竹⇒ササへの変化を材料に「植物の進化」を解説。さらに、地上に最後に現れたがゆえにようやく樹上に生きる道を見出した「ラン」や、滋味の薄い土地に生きるために昆虫を栄養にせざるを得なかった「食虫植物」の生き方など、厳しい生存競争を生き抜く植物の不思議を丁寧にご

説明いただきました。解説に合わせて茂みをのぞき込んだり、巨大な「ダイオウヤシ」をはるか見上げたり良い体操もしながら 3 時間があっという間に過ぎました。

1988 年に開設されたこの植物館は東京駅から新木場駅を経て約 30 分、東京湾に面した夢の島公園内にあります。隣接清掃工場からの温水を活用した 3 つの巨大なドームからなっていますが、中には水辺やせせらぎがあり、東南アジア、アマゾン川、アフリカザイール川流域の熱帯雨林



さらに加えて小笠原の植生が成立しています。

当日は生憎の雨でしたが、降雨を予想した適切な屋内観察会になっており、快適に植物観察を楽しむことができました。楽しい企画に参加させていただきました。ありがとうございました。



晴天に恵まれた秋の西伊豆合宿

美谷島 克実 (GEN 会員)

11 月 15 日～17 日の日程で GEN 関東ランチ秋の西伊豆合宿をおこないました。6 名が参加しました。

今回の合宿は、11 月 14 日から 15 日にかけて行われた。参加者は藤原さんを入れて 6 名。

1 日目の夜は恒例のカネジョーで懇親会。2 日目の午前は東海工業の採掘跡地で数年前に植えた馬酔木（アセビ）とシキミを観察。冬の寒風にも負けず大半が活着してしてくれたことは嬉しかったが、ほぼ同じ大きさの苗木を植えたのにその生育の違いにはいつも驚かされる。10 倍近くに育ったものもある。わずか数センチ下の地面の中で一体何が起きたのか、起きなかったのか。何億 km も離れた宇宙の彼方の「はやぶさ」は制御できても、数センチ下の見えない宇宙は今も謎のままである。大自然の複雑さや奥深さはまだまだ我々の手には届かないということ

か。40 年近く石油の井戸を掘り続けては失敗を繰り返した私には、またしても同じタメ息であった。

2 日目の午後は、西伊豆町の南に在る松崎町の歴史探方。明治の碩学・土屋三余の三余塾や北海道・十勝を開拓した依田兄弟の生家を訪ねた。明治という時代を支えたのは、志を高く持った名も無い人々であり、その彼らを輩出した無名の山野である。その一典型が松崎の地であり、三余塾であり、岩科学校である。詳細は字数の関係でお伝え出来ないが、この先西伊豆を訪れる方にはぜひ松崎訪問をお勧めしたい。

合宿 3 日目は里芋の収穫。今年は日照時間が短く、台風の影響もあって出来はイマイチだった。しかし、我々の畑の隣にある浅賀さんの畑の里イモは見事に成長して立派な子イモを付けて

いた。どんな作物でも「人の足音を聞いて育つ」という。我々の里イモは植えたその日から収穫の日まで全く誰の足音も聞いていないのだから、その出来をボヤク方が罰当たりであろう。それでも何とか我家へご近所に配るだけの収穫が得られてホッとした。最後に、今回の合宿は 3 日間とも実にお天気に恵まれた。水平線に沈む熟し柿のような夕陽が今も忘れられない。

『緑の地球』を 電子版でお届けします

現在、ご希望のかたに GEN の会報『緑の地球』の電子データを e-mail にてお届けしています。経費と資源の節約にご協力いただけるかた、また、印刷物がたまって困る、パソコン等で気軽に読みたいというかた、GEN 事務局までお名前と送付アドレスをご連絡ください。次号より PDF ファイルで送付いたします。



大同緑化協力 25 年の軌跡

日陰斜面（陰坡）と日向斜面（陽坡）

GENの山西省大同市での25年の緑化協力を振り返り、当時の写真も交えてシリーズでご紹介します。今回で17回目です。（高見邦雄）

大同での緑化協力をはじめて最初の秋（1992年）、渾源県に滞在中に北岳恒山に登りました。山頂から稜線の踏み分け道を歩きはじめてびっくりしました。道の左側（北側）には木が育って林になっているのに、右側（南側）は草もまばらなのです。そのときは意味不明でしたが、とりあえず写真を撮りました。

このような乾燥地では北向きの日陰斜面（中国語で陰坡）は植物が育つけど、南向きの日向斜面（陽坡）は、乾燥が厳しいことと日較差が大きいため、植物が育ちにくいのだそうです。

とくにマツがそのようで、地元には「陰坡的松樹、陽坡的柏」という成語すらあります。マツは日陰斜面、コノテガシワは日向斜面というわけです。

私たちの植樹が苦勞した原因にこのことがあります。北のほうからみると、大同には采涼山、龍首山・六稜山、恒山、太行山といった大きな山がありますが、ほぼ例外なく北側が切り立ち、南側がなだらかです。ということは緑化に有利な北側は面積が少なく、面積が広く緑化にとって重要なのは、植物の育ちにくい南斜面だということです。

たとえば大同県聚楽郷に私たちは采涼山プロジェクト（230ha）を建

設し、モンゴリマツ（樟子松）を植えました。采涼山はあそこからほぼ10km北にあり、海拔2144mですが、そのふもとにあることから采涼山…と呼んできたわけです。

この山の北面は新栄区に属し、大同市林業局が経営する長城山林場がおかれ、1950年代に植林されたカラマツの林がすでに大きく育っていました。

私たちが植えはじめたあそこや、その奥に隣接するカササギの森は、以前は畑だったのに収穫が乏しいために放置され、植林も手つかずだったのです。ついそう書いたのですが、翌春の最初の植栽に備えて整地をはじめた段階で気づいたことがあります。半ば崩れた整地の跡が残っているのに、樹木はなかった。何年か前に植えたけど、活着しなかったということです。

日本からの協力ツアーが訪れるたびに、私はつぎのことを紹介します。植



恒山山頂



南天門自然植物園

える前年の夏、雨が降る時期に、等高線に沿って幅60cm、深さ30cmの溝を掘り、その土を下手に積み上げて土手をつくります。このように整地すると、降った雨は溝の部分に集まって土中に浸透し、気温が下ると蒸発を抑えられ、やがて凍結して春までそこに蓄えられます。翌春、気温・地温があがるころに、小さな苗を溝の底に植えますが、そのころには凍結が融けて、その水が苗を育てるわけです。

さらに、この溝と土手とがつくる斜面が、人工的な日陰斜面・陰坡になるわけですね。それは小さなものですが、植える苗も地上部10～15cmの小さなものなので、効果はてきめんです。地元の草の根技術はすごいですね！

霊丘県の南天門自然植物園でもそのことがよくわかります。陰坡にはナラ、シナノキ、カバノキなどの樹木が早くから繁りました。それにたいして陽坡は、岩盤がむき出しになり、草もほとんどなかったのです。ところがいまでは、南斜面にもトネリコ、ニンジンボクを筆頭にたくさんの灌木が茂り、やがて喬木もでてきて、樹種の数からいえばこの陽坡のほうがずっと豊富です。どちらも重要なのですね。



南天門自然植物園

大阪自然史フェスティバルに初出展しました

11月16日と17日の2日間、大阪市立自然史博物館にて大阪自然史フェスティバルがおこなわれ、GENは今回初出展しました。これまでに出席したイベントは国際協力が中心でしたので、自然をテーマにしたイベントはどんな

ものかと楽しみにしていましたが、事前の搬入のときから各出展団体のブースの装飾の力の入れようにはびっくり。折り紙の鳥が舞っていたり、水槽を持ち込んで生き物を展示したりなど、各自好きな分野での工夫を凝らした展示

物の数々はどれも見ていてわくわくするものでした。

そしてGENのブースもまだまだ工夫の余地があるなと思い知らされ、来年以降もう少し目を引くような展示をしなければ、と反省しました。

自然というくくりでも、樹木、草花から野鳥、昆虫、きのこ、魚、石などなどじつにさまざまな分野があることが実感でき、また、そういうも（ノ）

黄土高原史話 <96>

北魏から東魏・西魏の分立へ

谷口 義介（GEN 会員）

ここで一度おさらいしておこう。

黄土高原の北部で396年に成立した北魏は、2年後の398年、今の山西省大同に首都平城を営んで、約100年間北中国に覇を唱えるが、494年、中央に進出して河南省洛陽を都とし、今の江蘇省南京に拠った南の政権（東晋・宋・齊・梁）と天下を二分する。都では仏教文化が花開き、その繁華なありさまは『洛陽伽藍記』の伝えるところだ。

しかし、北魏の勢威も永くは続かず、約40年後の535年、東と西に分裂する。すなわち、東魏（534～550）→北齊（550～577）は河南・河北両省境の鄴に、いっぽう西魏（535～556）→北周（556～581）は陝西省の長安に、それぞれ都を置いて対峙する。

政治史の流れからいうならば、北魏→西魏→北周→隋（581～619）→唐（618～907）

がメインだが、仏教文化の継承という観点から、本シリーズでは

北魏→東魏→北齊のラインを6回にわたって述べてきた。黄土高原の範囲から逸脱することになったのだが……。

今回以後、あらためて話を西に移そう。

北魏最後の孝武帝（532～534在位）は実力者高歓により擁立されるも、その専権を嫌って伐とうとしたが、あえなく失敗、534年7月、長安の宇文泰のもとに逃げ込んだ。そのころ長安を中心とした関中（陝西省）には、黄土高原の北の端（内モンゴル自治区）の武川鎮から南下した軍団のボス宇文泰が、

独自の勢力を築いていたからだ。

虎の子の孝武帝に逃げられた高歓は、534年10月、やむなく清河王元善見をかつぎ上げ、都を洛陽から鄴に移した。これが東魏第1代の孝静帝（534～550在位）。

かくして鄴で孝静帝を奉ずる高歓と、孝武帝を長安に迎えた宇文泰の両勢力が、旧都洛陽をはさんで東と西に分立する。

ただし長安では、534年12月、「〔孝武〕帝 酒を飲むに、酖に遇ひて崩す。時に年二十五。」（『北史』卷五「孝武帝紀」）

とあるように毒殺されたとも、あるいは

「帝 宇文黑獺の害する所と為る。時に年二十五。」（『魏書』卷十一「出帝紀」）

とみるごとく宇文泰の手の者に暗殺されたとも。

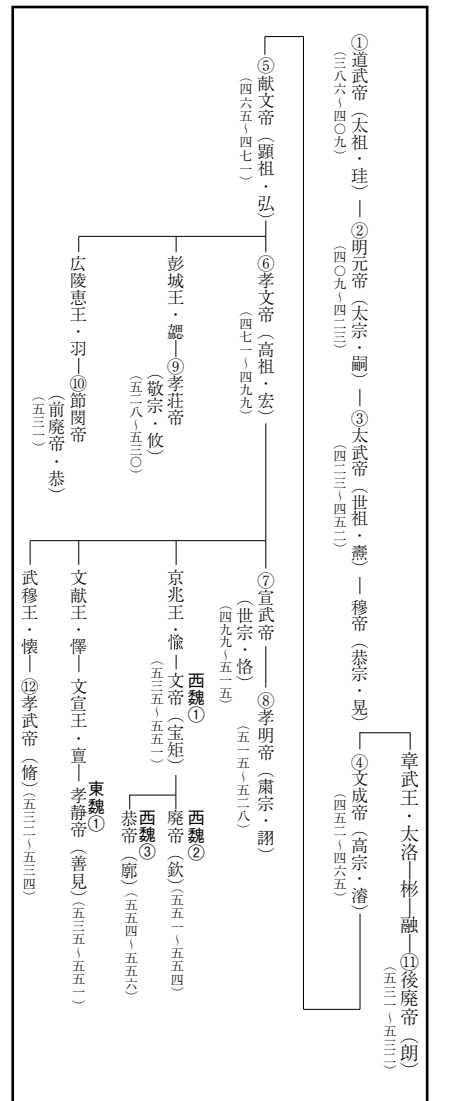
『魏書』は『北史』の記述を踏まえて、「悖德甚だしと為す」と付言して、その死を孝武帝の背徳乱倫に帰しているが、実のところ絶対権力者の邪魔になったからだろう。

それはともかく宇文泰は、孝武帝の従兄にあたる南陽王元宝炬を擁立し、西魏の第1代文帝（535～551在位）として即位せしめた。

結果、東西に二人の皇帝が分立し、約1世紀半にわたり華北に君臨した北魏帝国は、東魏と西魏に分裂した。

（系図は『図説・中国の歴史（3）—魏晋南北朝の世界』（講談社、1977年、

94ページによる）



北魏および東魏・西魏（拓跋氏）の系図

（ノ）のが好きでたまらない人たちが集まって年に1度おおいに宣伝・交流できる貴重な場であることもよくわかりました。

今回の来場者数は過去最多の26,000人と盛況だったようです。2日間を終えたあと、すでに来年のことを考えて楽しみにしていました。来場者の半数以上がリピーターというのも納得。今

後もぜひ出展したいです。（河本）



GEN 自然と親しむ会 無煙炭化器を使った炭焼き中止しました

11月24日（日）に予定していたGEN 自然と親しむ会 無煙炭化器を使った炭焼きとバーベキューは、雨の予報が出ていたため中止しました。

情報ひろば
いっしょなかたち

第27回
ワン・ワールド・
フェスティバル

国際協力 NGO などの活動紹介や講演会など、西日本最大の国際協力・交流のイベントです。

○日時：2月1日（土）～2日（日）10時～17時

○場所：カンテレ扇町スクエア（1階）・北区民センター・扇町公園（大阪メトロ「扇町」駅直結、JR 環状線「天満橋」より徒歩3分）

○入場無料・雨天決行

○主催・問合せ：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会事務局（〒546-0002 大阪市東住吉区杭全1-15-18 大西ビル3階（特活）関西国際交流団体協議会内 tel. 06-6777-1039 fax. 06-6777-2050 e-mail: onefes.contact-post@onefes.net URL https://onefes.net/）

シンポジウム

天然記念物和泉葛城山ブナ林の
過去 現在 未来を語る

和泉葛城山のブナ林の現状と今後の保全のあり方を考えます。

○日時：2月22日（土）14時～16時

*当欄掲載のイベント情報は情報提供を受けた時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

30分（開場：13時30分）

○会場：貝塚市教育研究センター研修室（貝塚市二色3-25-5）

○基調講演「ブナ林保護増殖の経過」
布谷知夫氏／調査報告「ブナの結実・芽生え・若木の生育など、調査結果からわかったこと」田中正視氏／パネルディスカッション〈パネリスト〉
布谷知夫氏、田中正視氏、岡本素治氏、前中久行氏、森川利信氏〈コーディネーター〉佐久間大輔氏

○参加費：無料

○定員：50名

○主催：貝塚市教育委員会、岸和田市教育委員会、公益財団法人大阪みどりのトラスト協会

○申込み・問合せ：公益財団法人大阪みどりのトラスト協会（tel. 06-6614-6688 fax. 06-6614-6689 e-mail midori@ogtrust.jp）専用申込フォーム <http://bit.ly/ogt2020buna> もしくはファクス、メールにてお名前、ふりがな、所属、電話番号、e-mail、お住いの市町村を明記してお申込みください。

第23回

六甲奨学基金のための古本市

六甲奨学基金の古本市のため、古本

を集めています。ご自宅で眠っている本がありましたらお送りください。

○受付期間：2月15日（土）～3月31日（火）まで

○送付方法：直接持参または送料送り主負担で送付【注意】汚れのひどいものは不可。辞書、新しい本歓迎。絵本、マンガ、洋書可。雑誌、教科書、参考書、コンピューター解説書、文学全集、百科事典などは不可。お送りいただいた本はお返しできません。

○送り先・問合せ：神戸学生青年センター古本市係（〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 tel. 078-851-2760 fax. 078-821-5878 e-mail: info@skyc.jp URL: <http://ksyc.jp/>）

★六甲奨学基金のための第23回古本市

●3月14日（土）～5月17日（日）まで毎日開催します。本の整理などのボランティアも募集しています。詳細は上記までお問い合わせください。

編集後記

2020年もよろしくお祈いします。年越しでインフルエンザにかかり、休日診療所に行ったら同じ境遇の人たちでゴッタがえしていました。みなさまどうぞお身体ご自愛ください。（河本）